

機関番号：23302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：平成18年度～平成20年度

課題番号：18592377

研究課題名(和文) 子どもの虐待予防に関する研究：母の自己効力感を高めるペアレンティングプログラムの開発

研究課題名(英文) Development of Parenting Program with the aim of enhancing mother's Parenting Self-efficacy to prevent child abuse

研究代表者

西村 真実子 (MISHIMURA MAMIKO)

石川県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：50135092

研究成果の概要(和文)：

カナダの親育ち支援プログラム「Nobody's Perfect」の枠組みを活用し、育児不安や困難・虐待傾向に悩む母を対象としたプログラムの開発が目的。ねらいを①エンパワーメント(自己効力感を高める等)②サポートし合う仲間づくり③自分の考え方等に気づく④自分に合う子育てのやり方、長所を見つける⑤育児不安・困難・イライラの軽減とし、9グループに実施し評価した。①～④を評価する質問紙調査を実施、有効な回答が得られた38名の介入群と、年齢、子どもの人数・発達段階がほぼ同じ38名の対照群のデータを分析。その結果、(1)介入群の母の「抑うつ」「敵意・怒り」「当惑」「自己効力感」の各得点が前後(または1か月後)で好転。(2)介入群で困惑する母がプログラム前→3か月後に減少したが、対照群では変化なし。(3)参加者ほぼ全員が自分の考え等に気づいたり、新しい考え・視点・子育てのやり方を獲得していた。以上より、プログラムのねらいに対し効果を確認。一方、対人関係不安が高く、うつ傾向の強い母で改善しない者もいて、今後の課題もある。

研究成果の概要(英文)：

We are aiming at the development of the parenting program for mothers with childcare difficulties or maltreatment or child abuse utilizing 'Nobody's Perfect:NP' parenting program that had been developed in Canada. The purpose of the NP program is to empowered mothers by enhancing mother's parenting Self-efficacy and to make the friends who supports each other, and to notice my idea, and the way of bringing up a child that suits me or my merit, and to reduce the anxiety and the irritation of the child care.

38 mothers who attend the NP parenting program(experimental group) and 38 mothers who not attend its program(controlled group) were questionaired according to evaluation index. The score of depressin scale, Hostility and Anger(POMS), Discomposure(POMS), and parenting Self-efficacy of mothers of Experimental group rose significantly before and after the NP program. It has not decreased in controlled group though the number of mothers perplexed when a child is brought up before and after the NP program decreased in experimental group. The NP program for mothers with childcare difficulties or maltreatment or child abuse was effective in the purposes.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成18年度	1,200,000	0	1,200,000
平成19年度	500,000	0	500,000
平成20年度	1,600,000	0	1,600,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	0	3,300,000

研究分野：子育て支援、子どもの虐待予防

科研費の分科・細目：臨床看護学・小児看護学

キーワード：ペアレンティング・プログラム、子育て支援、子ども虐待予防、自己効力感

1. 研究開始当初の背景

子どもの虐待予防においては、子どもの心身に悪影響が出る前の段階において、予防的に親子を支援することが重要である。親子への支援としては、(1)一時保育などの子育て・家事の物理的サポート、(2)心理的ケアや治療、(3)子どもへの適切な関わりに向けての援助、すなわち子どもとどう関わったらいのかを親が体験的・具体的に学ぶ、などが挙げられる。本研究課題は、この中の2つ目と3つ目が関連する援助方法を開発しようとしている。育児困難や虐待を抱える母親は、わが子を受け入れることができなかつたり不安感が強いとともに、自己効力感が低く、自分に自信のない者が極めて多い。そこで、自己効力感や自信を高めることをめざした、体験学習型の「ペアレンティング・プログラム」を作成する必要があると考えた。

2. 研究の目的

育児不安や困難、虐待傾向に悩む母親を対象とした、自己効力感を高めることをめざした「ペアレンティング・プログラム(親支援プログラム)」の有効性を明らかにすることである。

3. 自己効力感を高めることをめざした「ペアレンティング・プログラム(親支援プログラム)」

カナダの親育ち支援プログラム

「Nobody's Perfect(以下NPと略す)」の枠組みを活用し、育児不安や困難・虐待傾向に悩む母を対象としたプログラムの運営方法を考案した。ねらいは、①エンパワーメント(自己効力感を高める等)②サポートし合う仲間づくり③自分の考え方等に気づく④自分に合う子育てのやり方、長所を見つける⑤育児不安・困難・イライラの軽減である。母親の募集は、「これでいいのかなと不安だったり、どうしたらよいか途方にくれたり、イライラしたり、あたったり、母親失格だと自信をなくしたり、自分を責めたり、我が子なのにかわいくないと思ったり」というような、母親がアクセスし易い文言を記入したちらしを用いた。10名程度の母親に対し、2時間のセッションを週に1回、計6回行う。セッションでは、母親たちの合意で決めた、しつけ、イライラ、夫との関係などのテーマについて、2名のファシリテーターが進行の基に話し合う。

NPプログラムでは、「はじめから一人前の親などいない。親は誰でも情報とサポートを必要としている。互いにサポートしあうグループの一員になることで、参加者は自分の長所に気づいたり、自分に何が必要かを理解することができる。そして、親のニーズを満たすことは、その親が子どもの要求しているも

のを満たせるようになるための大きなステップとなる。」と考えている。そして、4つの基本的な考え方、①価値観の尊重②体験を通して学ぶ③エンパワーメント④安心感の確保に則ってプログラムは運営、進行される。

4. 研究の方法

(1)対象者

①プログラムに参加した母親(介入群)

2007年2月～2008年9月に実施された計6クルールのプログラムのいずれかに参加し、プログラム前後の質問紙調査に協力した乳幼児の母親38名

②プログラムに参加していない母親(対照群)

2007年11月～2008年2月および2008年6月～7月に市の子育て広場を利用し、質問紙調査の協力依頼に対し了承し回答した乳幼児の母親のうち、年齢と子どもの人数・発達段階において介入群の母親おのおのとはほぼ同じである母親38名

(2)調査方法および倫理的配慮

介入群の母親にはプログラム開始前と終了時、1か月後、3か月後に調査を依頼した。対照群の母親への調査は、子育て広場に調査用紙と協力依頼文を設置して行った。

調査用紙に調査の主旨、調査者の連絡先、調査結果を統計的に処理し個人が特定されることはないこと、データは調査目的以外に使用しないこと、個人情報漏れないことなどの倫理的配慮を明記した。

(3)調査内容

プログラムの5つのねらいの評価指標は、①エンパワーメント；子育ての自己効力感尺度日本版(Tool to Measure Parenting Self-efficacy; S.Kendall, 2005, 米田・北岡・西村, 2008)と、POMR短縮版(Profile of Mood Status; McNairら, 1992, 2003, 横山1994)、②サポートし合う仲間づくり；プログラム終了後のグループ活動の状況、③自分の考え方等に気づく；プログラム終了時の自由記載アンケート(NPプログラム指定)、④自分に合う子育てのやり方、長所を見つける、⑤育児不安・困難・イライラの軽減；ベック抑うつ尺度日本語版(Beck Depression Inventory; Beckら, 1961, 1979, 林・瀧本1991)と研究者らが作成した「育児不安・困難、困惑、子どもへの陰性感情、虐待不安」を問うた設問を用いた。

(4)分析方法

介入群と対照群の各尺度得点の差、および各群におけるプログラム前後の尺度得点の差を、二元配置分散分析、t検定を用いて分析した。育児不安や困難等を感じた頻度がプログラム前後で差がないかは、 χ^2 検定を用いて分析した。

また、介入群のプログラム終了直後、1か

月後、3か月後の各指標の経時的変化は、一元配置分散分析、多重比較を用いて分析した。さらに、プログラム終了時の自由記載の調査内容をカテゴリー化した。

4. 研究成果

(1) 母の属性 (表1)

両群の母親の属性、サポート、母親グループ等への参加の有無、NP前の育ての気持ち(図1)には有意差はみられなかった。調査期間中、両群の母親に引越、家族の入院・死亡、出産などの母親の心理に影響を及ぼすようなライフイベントはなかった。

表1 母親の属性

項目	介入群(n=38)	対象群(n=38)
平均年齢(±標準偏差)	33.9(±3.9)	33.8(±3.6)
子どもの人数(±標準偏差)	1.7(±0.7)	1.6(±0.7)
内訳		
1人	18(47.4)	18(47.4)
2人	16(42.1)	16(42.1)
3人	3(8.9)	4(10.5)
4人	1(3.6)	0(0.0)
職業形態		
無職	33(86.8)	32(84.2)
有職	5(13.2)	6(15.8)
常勤	3(60.0)	4(66.7)
パート	2(40.0)	2(33.3)
家族形態		
核家族	32(84.2)	34(89.5)
複合家族	6(15.8)	3(7.9)
不明	0(0.0)	1(2.6)
子どもを数時間預けられる人		
いる	37(97.4)	33(86.8)
預けられない人	1(2.6)	5(13.2)
悩みを打ち明けられる理解者		
いる	35(92.1)	34(89.5)
いない	3(7.9)	4(10.5)



図1 介入群と対象群におけるNP前の子育ての気持ち

(2) 介入群と対象群におけるNP前後の各指標得点の変化

① 抑うつ得点の変化 (図2)

抑うつ得点を大学生女子303名の平均値と比較すると、NP前の介入群の母親の得点が高かった。

介入群において、NP前後でうつ得点有意に下がり、NPの効果であると考えられた。

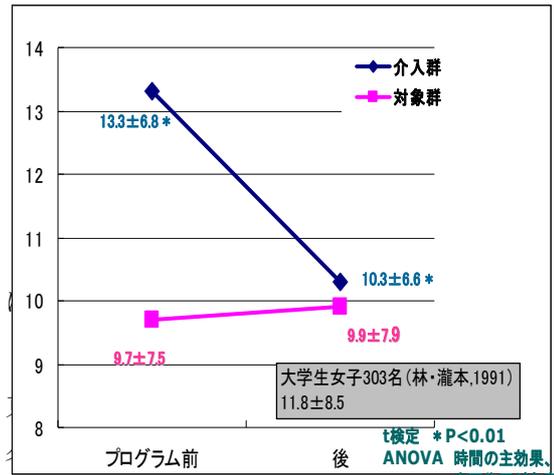


図2. 介入群と対象群におけるNP前後の抑うつ得点の変化

② POMS標準化得点の変化(図3)

NP前の介入群の母親のPOMS「緊張・不安」「抑うつ・落ち込み」「混乱」の各得点が、対象群の母親に比べて有意に高かったが、NP後では両群の得点に差はなかった。

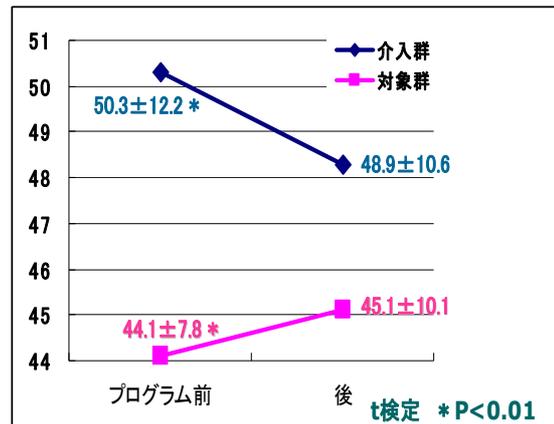


図3. 介入群と対象群におけるNP前後のPOMS「緊張・不安」得点の変化

③ 子育ての自己効力感得点の変化(図4)

介入群の母親のNP前の自己効力感尺度の下位尺度「子どもの理解と相互作用」と「しつけとセルフコントロール」の得点が、乳幼児の母親の平均得点に比べ低かったが、NP後にはそれぞれの得点が有意に上昇し、「子どもの理解と相互作用」の上昇はNPの効果であると考えられた。

また、介入群の母親のNP前の自己効力感尺度の下位尺度「プレッシャーとバンダリー」「ルールを守らせる力」の得点が、乳幼児の母親の平均得点より低かったが、NP後にはそれぞれの得点が有意に上昇し、「プレッシャーとバンダリー」の上昇はNPの効果であると考えられた。

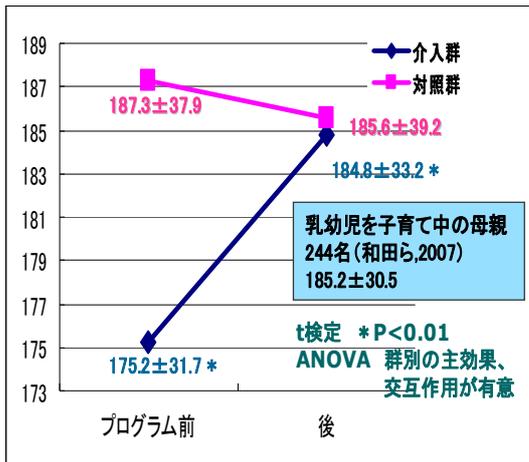


図4. 介入群と対照群におけるNP前後の子育ての自己効力感「子どもの理解と相互作用」得点の変化

(3) 介入群におけるNP前・直後・1か月後・3か月後の各指標の推移

① 抑うつ得点の変化(図5)

NPプログラム終了直後・1か月後・3か月後の抑うつ得点は、NP前の得点よりも有意に低く、NPの効果であると思われた。

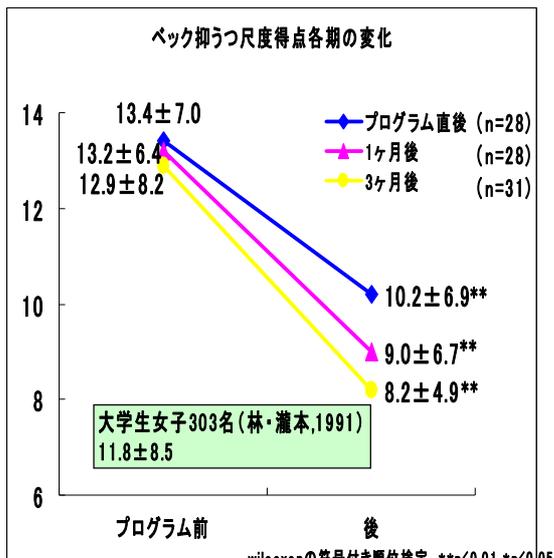


図5. 介入群における抑うつ得点のNPプログラム前・終了直後・1か月後・3か月後の変化

② 自己効力感得点の変化(図6)

NPプログラム終了直後・1か月後・3か月後における自己効力感の全下位尺度「子どもの理解と相互作用」「しつけとセルフコントロール」「プレッシャーとバンダリー」「ルールを守らせる力」の各得点は、NP前の各得点よりも有意に高く、NPの効果であると思われた。

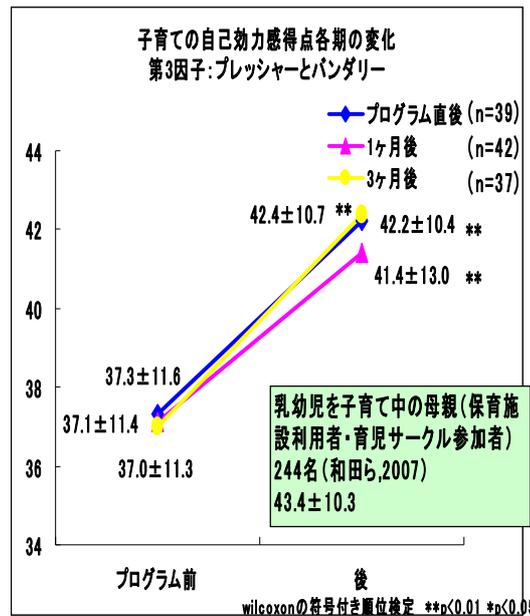


図5. 介入群における自己効力感下位尺度「プレッシャーとバンダリー」の得点のNPプログラム前・終了直後・1か月後・3か月後の変化

③ 「育児不安・困難、困惑、子どもへの陰性感情、虐待不安を感じる頻度」の変化
NPプログラム終了直後・1か月後・3か月後それぞれの時期に母親がこれらの感情を感じた頻度を、NPプログラム前と比較したが、個人のばらつきが大きく、一定の傾向はみられなかった。

(4) 介入群におけるNP終了時の自由記載のアンケートの結果(抜粋)

① 自分の考え方で気づいたこと

- ・わが子や自分の存在・あり方をじっくり考えた
- ・自分の本当の考えに気づいた
- ・行方への対処法で、これは駄目ということではなく、いろいろな考え方があるのだということ
- ・悩みの種をいろいろな角度から見直せた
- ・自分が完璧でないのに、子どもに完璧を求めるのはあんまりだということ
- ・こうでなければ・こうしなければという思いが強すぎたこと 等

② 変化として感じたこと

<感情・認知面>

- ・子どもへの肯定的な意識
子どもの存在のありがたさを感じるようになった、子どもが愛しくなった
- ・セルフコントロール
怒ってはダメと自分をコントロールできるときもあった、落ち着いて子の行動をみれるようになった、叱る時はカーッと忘れてしまうが、後になってどうしてかを考えるようになった

<行動面>

- ・あまり怒らなくなった
- ・周りの人と積極的に関わるようになった
- ・子どもに謝れるようになった

- ・今まで自分の方が一番よいと思って話をするタイプだったが、少し違う対応ができるようになった

<態度・姿勢面>

- ・落ち着いていこう思った
- ・子どもがどう思っているかを考えながら対応しようと思う
- ・娘が愛されていると感じられるよう工夫・努力してみようという前向きな気持ちになれた

③新しく知った子育ての手法

- ・イライラ対処法(タイム、その場から離れる、怒りを書いてみると冷静になれる 等)
- ・子どもに甘えてもらうこと
- ・子どもに結果を知らせること
- ・家族間でルールを作ること
- ・まずは子どもに自由にやらせること
- ・あとで子どもに誠意をもって謝ること・謝る姿勢で接すること
- ・きょうだいへの接し方
- ・自分を信じて自分の思ったやり方をする

(5)まとめ

- ・「いらいらする、子どもにあたる」等という文言のちらしで募集した母親の抑うつ得点が比較的に高く、自己効力感得点は低かった。
- ・NPプログラムに参加した母親(介入群)は、対照群に比べ、抑うつ得点がNP前後で低下し、自己効力感得点が上昇していた。抑うつ傾向や自己効力感に影響すると思われるプログラム以外の要因、母親の属性、夫との関係などのサポート等が両群において差がなかったことより、本NPプログラムが育児不安や困難、虐待傾向に悩む母親の抑うつ傾向を改善し、子育ての自己効力感を高める効果があると思われた。

5. 主な発表論文

[雑誌論文] (計3件)

- ①吉田和枝、西村真実子、堅田智香子、米田昌代、東雅代、曾山小織、和田五月、金川克子、韓国の産後調理院の制度と現況 韓国視察報告(査読なし)、ペリネータルケア、28(1)、77-84、2009
- ②東雅代、西村真実子、米田昌代、井上ひとみ、梅山直子、宮中文字、堅田智香子、和田五月、松井弘美、乳幼児をもつ母親の育児困難の状況 - 母親および子育て支援に関わるエキスパートへのフォーカス・グループ・インタビューから -、石川看護雑誌(査読あり)、6(1)、1~10、2009
- ③西村真実子、吉田和枝、米田昌代、堅田智香子、東雅代、和田五月、曾山小織、金川克子、韓国の産後療養院の視察、石川看護雑誌(査読なし)、6(1)、125~127、2009

[学会発表] (計5件)

- ①米田昌代、東雅代、西村真実子、堅田智香子、和田五月、松井弘美、東亜希、親育ち支援プログラム Nobody's Perfect の実践紹介、第2回看護実践学会学術集会講演集(査読なし)、50~51、2008年10月、金沢市
 - ②西村真実子、米田昌代、堅田智香子、東雅代、和田五月、曾山小織、吉田和枝、育児不安や育児困難に悩む母親を対象とした虐待予防をめざした親育ち支援プログラム(ノーバディズパーフェクト)の評価、日本子どもの虐待防止学会第13回学術集會みえ大会プログラム・抄録集(査読あり)、2007年12月15日、三重市
 - ③米田昌代、西村真実子、堅田智香子、東雅代、和田五月、曾山小織、吉田和枝、TOPSE(子育ての自己効力感尺度)の日本における信頼性・妥当性の検討、母性衛生(第48回母性衛生学会学術集会抄録集) (査読なし)、2007年10月12日、筑波市
 - ④東雅代、西村真実子、米田昌代、堅田智香子、和田五月、曾山小織、吉田和枝、乳幼児をもつ母親の育児困難の状況、母性衛生(第48回母性衛生学会学術集会抄録集)(査読なし)、2007年10月12日、筑波市
 - ⑤和田五月、西村真実子、米田昌代、堅田智香子、東雅代、曾山小織、吉田和枝、乳幼児の母親の子育ての自己効力感の実態、母性衛生(第48回母性衛生学会学術集会抄録集)(査読なし)、2007年10月12日、筑波市
6. 研究組織
- (1) 研究代表者
西村 真実子 (MISHIMURA MAMIKO)
石川県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号：50135092
 - (2) 研究分担者
米田昌代 (YONEDA MASAYO)
石川県立看護大学・看護学部・講師
研究者番号：80326082

堅田智香子 (KATADA CHIKAKO)
石川県立看護大学・看護学部・講師
研究者番号：70468221

東 雅代 (AZUMA MASAYO)
石川県立看護大学・看護学部・助教
研究者番号：80457887

曾山小織 (SOYAMA SAORI)
石川県立看護大学・看護学部・助手
研究者番号：90405061

和田五月 (WADA SATSUKI)
石川県立看護大学・看護学部・助手
研究者番号：90509572

吉田和枝 (YOSIDA KAZUE)
石川県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号：50353032